


 書評

山鳥重著

脳のふしぎ

神経心理学の臨床から

松岡洋夫

本書は、著者が1975年から2002年の間に主に一般向けに書かれた神経心理症状などの解説29編を一冊にまとめて発刊されたものである。本書を著した意図や著者の神経心理学に対する姿勢については、「はじめ」の中で明瞭に示されている。特に、著者の神経心理学に対する姿勢に関してその一節を紹介すると、“...脳損傷にも神経心理症状にもいっぱいの個体差を抱えた中で、神経系心理症状発生の共通原理を探り、そうした困難な障害を抱え込んでしまった人たちの心をなんとか理解し、治療の方向づけをしたい、というのが筆者の実践してきた神経心理学である...”と、さらに“...脳が生み出す心などと言うと、脳に重点がかかっているように思われるかもしれない。そうではない。重点は心にある。脳全部で、いや脳を含めて個体全部で必死に環境に反応しようとしている心という現象を理解したい、ということである...”と述べられている。

本書は、I.読み書きのしくみ、II.話し言葉のしくみ、III.視覚のしくみ、IV.記憶のしくみ、V.行為のしくみ、VI.心を立ち上げる脳、VII.心の科学とモノの科学、と神経心理学が扱う重要なテーマをすべて含んでおり、それぞれの領域の歴史も紹介されている。しかし、それらは決して教科書的な内容にとどまるものではなく、著者自身が症例と出会いその中で見えてきたものを固定概念を極力排して著者自身が考えたことを語りかけている。時には、著者流の解釈が登場してくるがそれは決して独善的なものではなく深い含蓄のこめられたものであり、冒頭で紹介した著者の意気が伝わってくる。

近年、精神医学において統合失調症の神経発達仮説や認知障害仮説が重要視されている中、特に欧米を中心に神経心理学の研究成果が続々と報告され、それらの仮説を構築する上での中心的役割を演じている。しかし、そうした欧米の流れはともすると心の構成要素としての神経心理症状への関心に限定され、「ここから脳」へと関心が向けられているようにも感じられる。もちろん、精神疾患の病態解明にはこうした方向性が必要であることは間違いないが、著者が強調している「脳からここら」という視点も精神医学では決して忘れてはならないことである。こうした意味でも、本書は多くの精神科医、特に精神疾患の臨床研究に携わる方にはぜひ読んでいただきたい。

個人的なことになるが、山鳥先生は2003年の春に東北大学を定年退官された。感銘深い最終講義を拝聴する機会に恵まれたが、その中で、左半球における音韻処理系、意味処理系と右半球の言語処理系についてまとめられた。それらは統合失調症の神経心理学にも重要な示唆を与えるものであった。そして、最後に“神経心理学を通してみる「生物学的人間学」がこれからの目標である”と述べられたことが印象的であった。本書を読みながら著者の歩みとこれからの方向性が理解できたように思われる。

本書は山鳥先生が歩んでこられた研究の歴史でもあるが、神経心理学そのものの歩みとも言えるだろう。

(東北大学大学院精神神経学分野)

● B6 415頁 2003 本体2,800円 そうろん社

(☎&Fax03-3480-5837) 刊